

新春のお慶びとともに会員諸兄のご多幸ご健勝をお祈り申し上げます

<支部長>

支部の活動概要

《12・1月の活動実績》

12.2(金) 横芝光町自衛隊協力会館山基地研修支援
1. 6(金) 第21航空群司令年始表敬(OB4団体代表)
1.22(日) 歴史研究会(水交会主催、原宿)
1月末 21空群司令への隊友会相談役委嘱式
1.28(土) 支部役員会(コミセン)

《2・3月の活動予定》

2.11(土) 現地研修支援(君津G、佐野地区)
3. 2(木) 千葉県隊友会理事・支部長会議(千葉市)
3.20(月) 館山市戦没者慰霊祭(鶴ヶ谷八幡宮)
3.25(土) 歴史研究会(水交会主催、原宿)
4. 1(土) 支部年度末役員会(コミセン)

年頭のご挨拶に代えて「隊友会活動について一言」 支部長

平成16年に支部長拝命と同時に隊友会に入会。経験・知識とも無いまま支部長を引き受けたこと自体、軽率・無責任のそりを免れないのですが後悔先に立たず、今日まで十数年間、隊友会の活動について模索しつつ、進歩前進を求めて微力ながらも努力をしてきたつもりです。

紙面の都合上、隊友会の活動について(総花論は省き)所懐の(ごく)一端を申し述べることにします。

隊友会活動の本質は？

隊友会が新公益社団法人の旗を掲げて5年が経過し、改善すべき点まだあるものの、以前と比べ隊友会の活動は間違いなく進化していると確信しております。公益法人は「不特定多数の人々益に資すること」を目的とするものですが、隊友会が特に力を入れて取り組むべきことは「自衛隊に対する協力支援」だと考えております。理由は、隊友会が陸海空自衛隊出身者(だけ)で構成される集団であり、「親身の協力支援」とともに全国的な組織力というポテンシャル(潜在能力)を備えているからです。この潜在力発揮の源になるのは、「自分(たち)のため」から一歩踏み出した「人のため、社会のため、そして自衛隊のため」という会員の意識作用だと思います。

まずは「隊友会の活動を知る(理解する)こと」から！

隊友会の活動が新聞やテレビで報道されることは滅多にありませんが、それに代わるのが定期的に配付される「隊友」や県・支部の「〇〇だより」なのです。これらの機関紙の情報から隊友会の活動を知り、その趣旨・意義の理解に努めようという、会員自らの能動的な働きが無い限り、隊友会活動の活性化も望めないと思います。

第21航空群・初飛行訓練行われる

1月6日(金)

新春の穏やかな快晴に恵まれ、富士を背景に第21航空群の初飛行訓練が行われ、翌日の房日紙には「海自第21航空群 ヘリ3機で初飛行」と報じられていました。4年前の初飛行では3個編隊・計9機のフォーメーションテイクオフの威容が頭にあるだけに、外部の人(我々OBを含め)には、物淋しさよりも意外に映ったことと思います。これが自衛隊・部隊の「現実」の姿の一面にほかならないのです。このへんにも「自衛隊・部隊に対する協力支援」を考える上での示唆があると見るべきではないかと思います。

<川村 記>

レクイエム

1/22 林 利夫会員 逝去(海事 享年89歳)

ご逝去を悼み謹んでご冥福をお祈り致します。 <支部会員一同>

平成29年度会費の納入について

会費収入は隊友会にとってかけがえのない運営資金となるものであり、ご理解ご協力のほどよろしくお願い致します。該当者には依頼書と振込書を同封しますので、3月末の期限までに納入お願い致します。

<事務局>

再見「シベリア抑留と北方領土問題」

言語に絶するシベリア抑留の実態・・このまま泣き寝入り？

昨年12月、房日紙に連載された「シベリア抑留を顧みて」を読んで、改めて72年前の旧ソ連による国際法・人道を無視した国家的な暴挙が想起されました。日本の降伏1週間前、突如、ソ連が不可侵条約を破棄して160万の大軍を満州、朝鮮に侵攻させ、降伏後も続けた軍事行動・残虐非道な行為とともに戦利品？として65万を超える将兵や満蒙開拓団の邦人を貨車でシベリア各地の収容所に連行・強制労働に従事させ、長い抑留生活の中で飢え、疲労、病気のため6万人以上の同胞が故国の土を踏むことなく斃れ、凍てつくシベリアの地に葬られたことは厳粛な歴史上の事実なのです。日露戦争以降、日本はロシア・ソ連と戦争したことがなかったはずですが、なぜこのような事態が起こったのか理解のしようがないのです。「不可逆的な解決」で合意されたはずの慰安婦問題がむし返される一方で、公式の謝罪も補償も行われていないまま関係者の高齢化とともに闇に葬られつつある抑留問題、皆さんはこの大きな矛盾をどのようにお考えでしょうか。

北方四島はこのままウヤムヤに？

昨年の日ロ首脳会談で、領土問題解決への道筋の複雑・困難さが改めて浮き彫りにされた感を否めません。「領土問題は存在しない」に固執するプーチン大統領には、返還に反対する8割以上の国民が後押ししているのです。しかし、ロシア国民は当時の真相を知らされていないのです。ひょっとすると62歳のプーチン大統領も・・・

事の発端が前述の降伏1週間前のソ連の一方的な対日参戦にあったことは疑う余地もないのですが、72年以上経った現在、多くのロシア人が北方四島は自分たちの領土と信じ込んでいるのです。一方、日本人の関心は決して切実なものと言えず、多くの人々の頭の中の北方四島は北海道の北の「ちっぽけな島」という程度の印象のようですが、結構大きな島なのです。クナシリ、エトロフ、ハボマイ、シコタン、これらの島名は古くからここを生活の場として定住したアイヌの人々が付けたものなのです。

シベリア抑留と北方四島の不法占拠 いずれも国際的に裁きを受けて然るべき国家的な犯罪・侵略行為なのです。日本がこのまま泣き寝入りしたのでは「日本は脅せばオトナシクなる国」などという不名誉なレッテルを貼られるのが落ちだと思のです。かつて日清戦争で日本が清国(現中国)から割譲された遼東半島を、ロシアの圧力で返還を余儀なくされた三国干渉事件を引き合いに出すまでもなく、この国は古来「超シタカな国」で通してきたのです。やはりこういう国に対してはそれ相応の対応が必要ですね。

<川村 巖会員(海)>

「海軍落下傘部隊」の生い立ちを尋ねる

日米開戦直前の昭和16年9月下旬、館山航空基地で2個中隊・1、500名の海軍特別陸戦隊が編成され、2箇月余の猛訓練の後、開戦初頭に南方での降下作戦を成功させ、以来、館山基地が「落下傘部隊発祥の地」として語り継がれている。しかしながら、降下作戦の経験もノウハウも無かった海軍が、2箇月余の訓練で実戦に臨んだことは驚嘆すべきことであるが、館山基地で誰が教育訓練を指導し、教育訓練のための術力がいつ・どこで・どのようにして育成されたのか、についてはほとんど知られていない。数少ない断片的な記録資料をもとに、落下傘部隊のルーツ・生い立ちを辿ってみた。ゼロからのスタート 「極秘第1001実験」から落下傘教育への始動

日米開戦1年前のS15.11、横須賀航空隊(追浜)で海軍大臣命令による極秘作業「第1001実験」が始められた。作戦用落下傘の開発を目的とし、6箇月余の実験で開傘率100%を保証する作戦用落下傘の開発・量産の目処が立った。同時に80名の降下経験者の誕生とともに落下傘の運用に関わる貴重なデータ・ノウハウが得られ、これらが以後の落下傘教育のかけがえのない礎(いしずえ)になったことは言うまでもない。

S16.6.1、館山砲術学校が開設され、海軍省から「落下傘教育(臨時講習)」に関する通達が出された。通達は、4箇月間の講習で基礎教育(館山砲術学校)と航空機からの降下術(館山基地)を修得させるもので、17年度からの教育開始に備え年度末までに候補者の選抜(人数不詳)と施設・教材類の整備を関係各部に示達するものであった。砲術学校の開設と同時に、前述の極秘実験に従事していた80名の研究員が同校に赴任したのは決して偶然ではない。来るべき落下傘教育の基幹要員(教官)として、教育態勢の早期確立という重責を一手に担っていたのである。

日米関係の悪化・情況の激変からもたらされたもの

前述の通達が出されたわずか3週間後(6. 25)、候補者の選抜を7月15までに早める督促文書とともに、8月から砲術学校において第1回臨時講習の開始が下令された。17年度計画の大幅な前倒しという、関係者にとってまさに驚天動地の出来事であった。さらに9月に入り、館山基地での特別陸戦隊の編成と急速錬成訓練が下令されるに至った。基礎教育中の講習員はそのまま陸戦隊に編入され、追加招集された訓練生とともに館山基地での2箇月間の急速錬成訓練に入った、というのが落下傘部隊の発祥に至るまでの経緯のあらましである。

館山基地での部隊の編成と急速錬成訓練を「山頂」に例えれば、これを極めるための道筋・登はんルートが、横須賀空での実験から開校直後の砲術学校に至る9箇月の表には出てこない関係者の粒粒辛苦の努力で築かれていたのである。 <自称地域史探索マニア その12>



《現存する唯一の「落下傘訓練」の痕跡》
(佐野、旧海軍館山砲術学校跡、房南中横)
筆者コメント:このプールの由来を知ることのできる記録・証言は皆無であるが、諸般の状況から、館山基地での急速錬成訓練中の洋上着水時の殉職事故の教訓に堪がみて、着水直前に落下傘のベルトを外す感覚を体験させるために作られたものと推測できる。従って着工は館山基地での急速訓練が終わってからのことであろう。